

旭が森日蓮聖人銅像建立100年慶讚（2022年）



當清澄山は、我祖日蓮聖人發軁の根本道場にして洵に本邦無二の靈域たり。是を以て古來其の事蹟を顯彰せんとするもの少なからざりしも毎に魔障に遭いて果たさず今日に至れり、然るに予の管長の職にありて東都に寓するや偶靈感あり曰く法華一乘の大法を以て澄山を莊嚴し聖人の事蹟を發揚すべしとこれ實に予が聖像建立の願を發せる動機なり。亦後親しくこの峯に登りて聖蹟を相し案を具し以て當山貫主玉瀧義秀師にはかる師大いに歓喜し俱に與に力

をあわせ淨業の完成を誓う。よつて總大五山 各本山貫主並びに元帥伯爵 東郷平八郎 公爵 德川家達 子爵 小笠原長生 海軍中將 佐藤鐵太郎氏等に諮り其の隨喜讚同を得、大正十一年十一月工事を起こし翌年一月六日より東都立正護国会をトし十七日の寒修行を為し市内を擊鼓練行したりかくのごとくにして淨業着々進捗し 將を得ず。佐藤中將大いにこれを憂ひ澄山を莊嚴し聖人の事蹟を發揚す

越えて二日突如として未曾有の関東大震災あり 房総最も激震當山も亦此の災を免るるに由なく塔宇の倒損するものは数えるに遑あらず 然るに独り何の瑞祥か假立の聖像のみ 巍然として直立し超然として相関せざるもの如し。経に曰く如来は既に三界の火宅を離れ寂然として閑居し林野に安處せりと蓋し之をいうか

然らば即ち當山は涌出寿量の両品に擬すべく これ實に我等同志の建立したる所似なり。

乃ち茲に此の碑を建てその由來を叙説し 以て後昆に示さんとす。詣者請い願わくは、之を忘る勿ながれ。南無妙法蓮華經。

大本山妙顯寺第五十四世
昭和三年龍集戊辰四月二十八日
大僧正 日辰謹撰
宮中顧問官海軍中将
子爵 小笠原長生謹書

回顧すれば建長五年四月二十八日我祖聖人が朝曦に向かい始めて玄題を高唱し給いしより爰に六百数十年一人之を唱え億兆之に隨い

清澄寺の日蓮聖人銅像

一山上奉安の概況 千葉県下の一大偉観一

建長五年四月二十八日、日蓮聖人が清澄寺境内東南の一角に於いて妙法の第一声を發して以来、房州の清澄寺は聖人出家得度の靈場・法華發展の靈域として日蓮四大靈場の隨一と云われ、徳川時代の盛時は云うに及ばず現住職玉瀧義秀僧正の代に至つて更に面目を一新し、大客殿の新築既に成り、茲に日蓮宗前管長河合日辰大僧正老躰を提げて日蓮大銅像建設を発願し、朝野の名士篤信の檀信徒之れに加わり玉瀧僧正過去二ヶ年に涉る活動となり其間一部偏狭なる妨害者現はれしも萬難を排して遂に去る八月三十日午後三時境内旭が森の山頂に日蓮聖人の大銅像を建設するに至つた。

奉安の概況

現代铸造界の泰斗、須田町廣瀬

中佐銅像、明治大学帝尊像製作者として有名なる渡辺長男氏の手により一世一代の力作と称せられし日蓮聖人の銅像は海路東京より房州天津に安着し、同町日澄寺境内に仮安置し檀信徒日夜參集して守護に努め其間諸般の準備を整えたるや、八月二十八日河合大僧正は多くの檀信徒に守られて京都より天津に出向同地にて清澄寺山主玉瀧僧正、房州日蓮宗録司本庄瑞量師及日澄寺住職諸師と共に大約の打合せをなし、翌八月二十九日午前四時日澄寺にて一座の法要終ると共に妙法の声太鼓に送られて重量五百貫の大銅像は徐々として清澄寺に向かい壹里二十余丁の曲折せる山路も午後二時には早くも一千五百尺の高所清澄寺境内に到着したり、旭が森山頂に引き上げるに至つた。

銅像について

此の銅像は前記の如く斯界の巨匠たる渡辺長男氏が苦心慘憺あらゆる材料総ての記録を参考として謹製したるものにして其容貌の如き實に往時の傑僧日蓮を偲ばしむ

は一山の僧侶と共に客殿に休息せらる。山腹まで出迎えたる清澄青年団は多大の労力奉仕をなし且明朝まで銅像守護の任に當りたり。河合大僧正は午後七時玉瀧僧正と共に本堂に於て大法要をなし終つて檀信徒に對して一場の法話を試みらる、感動頗る大なり。翌三日早天一同は旭が森山頂に旭光を拝し直ちに引き上げに着手し午後三時萬歳の声と妙法の声鼓裡に大銅像は旭が森山頂所定の地に屹然東海に面して立つ、往年の偉傑日蓮聖人を目のあたり見るが如し、檀信徒踴躍歡喜して感涙にむせび遂に一語をも發する能はず、満寂として只一大偉僧の東海を望んで屹立するを見るのみ。誠に之れ天下の偉観にして千葉県亦ここに一異彩を加わえたりと云うべし

開眼供養式挙行

山頂に奉安を終了したるにより近日発起人協議を遂げ吉日をとて盛大なる開眼供養式を挙行する由にて当日は朝野名士発起人を始め日蓮宗全國寺院信徒各地より蜡集する筈なれば其盛觀は蓋く本県に於ては空前のものたるべく目下

に足り袈裟衣數珠より草履の末に至るまで一々精細確實なる歴史的考證の結果になれるものにして身長一丈、台座は自然美を損せざる様伊豆石を以つて圓み四辺の風光と相俟つて倍々其壯大なるを發揮せり、蓋し全國に於ける聖人銅像中一頭地を貫けるもの日本銅像大傑作と称するも過賞には非ざるべし。茲に至るまでの河合大僧正の努力殊に山主玉瀧僧正の苦辛は多大のものにして漸く今日酬いられたるもの全国信徒の信仰の対象として最も傑出せるものと云うべきなり。